演劇脚本

女夫浪江嶋新語

唐人髷今國性爺

千宗易悟道策前

合卷一册

版權
興行權所有

088772-000-1

特52-571

女夫浪江島新語・唐人髷今国性爺・千宗易悟道策前

竹柴　金作／著

M22

DBJ-0431

女夫涙江嶋新語

序清久

一　生嶋新五郎　地引町海老屋の場
一　中村清五郎
一　後藤の手代清助
一　弟子生嶋新六
一　田口專平
一　賈い熱田伴藏
一　留場　新太
一　若イ者半介
一　同　長八
一　中老　江嶋
一　部屋方おみき
一　賈い清五郎妹おきよ
一　奥女中宮路
一　同　梅山
一　茶屋娘お富
一　同下女お濱
一　芝居見物　大勢

No 18784/22
内交・明治

本舞臺四間の二重芝居茶屋見世先の道具軒口へ花暖簾を掛あり打出しの太皷にて幕明く、ト上手より芝居見物の仕出し出て向ふへは入る此中へ打交り中老江嶋奥女中宮路梅山酒に醉ふたるこなしにて是を留場龍太介抱仕乍出る跡より部屋方おみき出入町人清助茶屋の若ィ者半介長八敷物と煙草盆を持附添ひ出て來り(半長)まづ〳〵お二階へいらつしやいませ(梅宮)サァ〳〵是からお酒だ〳〵(龍)アヽモシおあぶなふムりまそト皆々二重へ上り奥へは入る留場龍太ハ客を送り込み上手へ引返えて這入る入替ッて上手より熱田伴藏敵役の侍にて出て來り(伴)コリャ〳〵あるヒハ居ぬか〳〵ト呼ぶ奥より茶屋娘お富出て(富)どなた様でござりまそる(伴)只今當家へ這入たる屋敷風の女連れハそちの内の客であらうな(富)何ぞ御用でムりまそか(伴)いかにも彼れ等に云分ッあつて談判に及ぶのだト奥より清助出て(清)是ハ先刻のお武家様まづ〳〵お上り下さいませ(伴)ィヤ先刻ろちを呼附けて神妙に致そ様にとあれ程堅く申付ケしに靜にでも致そ事か夫から猶々驕立ヲ其上ならそ棧敷から酒と飜して此如く主人から拜領の羽織へしみを附ケられてハ武士の一分相立ぬにかなる奴が酒を飜し身共に恥辱を與へしか得と談判せねばならぬト清助是を詫る伴藏當人を出さぬ内ハ了簡ならぬと立腹して居る奥より部屋方おみき出て(み)宮路様が團十郎をお譽なさる時夢中に成りお傍にありし燭徳利をお打返しなされし故思ハぬ麁相を致しました(伴)然らばそやつを是へ出せト奥より中老江嶋出て(江)御酒を過して棧敷にて麁相を致せし其者を誘引ふて參りし私故代ッてお詫と致しまそるト詫る(伴)ィヤ酒を飜せし其者を手討に致した其上で身共も切腹そる覺期血を見ぬ内ハ了簡ならぬト爰へ奥より茶屋の若ィ者二人出て見世先でハ人立ヲが致せば兎も角も奥へお通り下さりませ(伴)然らば奥で返事を待たんト若ィ者附て伴藏奥へ這入る(清)是ハ何でも金樽で濟せまそより外ハない何れ只今私がよひ様に計らひまそればあなたハ二階へお出なされませ(江)事あら立てハ身分にもかゝハる大事に及ぶ故そんなら何分頼みまするト江嶋奥へ這入る(みき)其扱ひハ兄さんよ逢ふて頼んで見ませうわいなァ(清)こなたの兄とハ(ミ)御殿奉公をそる者ハお上みの聞へを憚る故醫者の娘の積りにて御奉公にハ上りましたが實ハ私ハ狂言方の中村清五郎と申者の妹でござり升る(清)兄御が作者とあるからハ此相談をかけたなら又よひ工風があるかも知れぬト向ふより中村清五郎出て來る(み)兄さんよひ所へ來て下さんした(清五)よくけふハ見物に來た(清)清五郎さんがおみき殿の兄御と云事ハ知らなんだ(清五)是ハ後藤様のお手代清助さん今日ハ御苦勞様でござり升る(清)チトこなさんに頼みがあるが爰ハ見世先の事なれば奥へ往ッて下さりませ(五)どんなお頼みか伺ひませう(み)丁度よい所へ來て下そつたト三人奥へ這入る上手より生嶋新五郎弟子の新六を連れ幕明キの留場龍太附ィて出來り(龍)モシお富さん親方をお連れ申ましたト呼ぶ奥より娘出て(富)ェャ親方さんよくお出なさい升た(新)宮路様といふお客様が打出したら茶屋へ來いと此龍太へのお言傳故鳥渡御挨拶に參り

まシたト奥より以前の宮路梅山出て來り(宮)サア〳〵新五郎待兼升たぞつと二階へお揚り〳〵ト手と取らうとおてよろける此摸樣騒ぎ唄にて道具廻る

本舞臺茶屋の二階座敷下手に階子の下り口上手に以前の伴藏住居右鳴物にて道具留る

ト伴藏邊りへこなしあつて(伴)宮路と梅山に頼まれて成丈事をあら立る樣大キな聲でがなりしからいけふ建長寺の代參をかこつけて來た芝居見物露顯となれば江嶋の身の上こつちい思入いたぶつてトゥの詰りが内濟金叫せる奴が出ればいゝがト階子の口ゟ若ィ者出て(若)旦那樣にお目に懸りたいと御同役樣がいらつしやい升た(伴)何同役がトぎつくりして氣をかへ(伴)ハテ誰れ人が參つたかト思入階子の口ゟ以前の清五郎侍の拵へに成り揚り來て(清五)然らばあれに居るゝ仁が吾屋敷の家來とか(若)お屋敷を伺ひ升たら扇ヶ谷の六角樣の御重役だと仰せられました(清五)ハテなトこちらへ來て住ふ此内伴藏氣味わるきこなおにて(伴)拙者い昨日國元ゟ當地へ出府致したれば貴殿い御存じムるまいが田口專平と申者以後いお見知り下されひ(清五)手前い留守居役を勤むる鶴見千三郎と申者扨早速に申出ヒが我屋敷でい國風にて芝居い勿論遊所場へ家中の者が立入るい嚴敷く戒め重役の申渡しもある筈じやが夫を御存じムらぬか手前い斯樣な事共を詮議の爲の留守居役掟を破りそこ元にい今日芝居を見物召れ剩へ主人より拜領の御紋附迄穢せしとやら申事左それば主人へ申譯に切腹召れにや相成らぬがそれい御承知でムらうな(伴)ハテサそこが物の間違ひ只今も申通り昨日初めて國元より出府致せし拙者故屋敷の掟も弁へずかゝる遊所へ立入りましたが以後い屹度心得升れば何卒貴殿のお目觸しにて今宵の事い此座限りに御内分に下さる樣田口專平此通り〳〵ト下手へ下り平伏して二階の口へ逃て這入る跡を見送り(清五)是でこつちも安心したト上手ゟ江嶋おみき清介出て(江)ほんに清五郎殿のお見込み通り僞侍ひでムりましたか(清五)六角樣い堅いお屋敷で暮六ッ限りに御門がゞり出入をさせぬと聞てゐればお留守居役あら知らぬ事日が暮たのにゆう〳〵と家中のお武家が茶屋小屋に落附て居る筈いないと思ひ付たる僞侍ひ定紋附も臺附ケの衣裝で急ゥの間に合せかな貝張りの大小い直グに小道具で間に合ふのも狂言方の渡世柄うしろでせりふい附ケましても役者に成たい初めて故びつしより汗に成ましたト衣裝を脱ィで居る爰へ階子の口ゟ以前の奥女中役者を連れ茶屋の娘若ィ衆女酒肴の道具を持皆々揚ッて來り酒盛りに成り宮路梅山い新五郎の膝を枕に寐て仕舞ふ故下座敷へ酔ひの醒る迄寐かして置ふと皆々にて手舁にして連れて這入る跡ゟ江嶋清五郎清助おみき殘り江嶋い新五郎に思ひをかけしこなしにて(江)さうしてあの新五郎にい定めて連れ合の美しいのや勘負のお客の其中で言ひかいした女中樣が澤山にありませうな(清五)イヱ其樣なお客樣いまだ一人りもムりませぬ又女房も持ませず獨身者でござりまする(江)さういふ事ならお願みが(清五)何改ッてお願とい(江)サア一盃呑升せうわいなアト言ひ出し兼ることなし合方にて道具廻る

本舞臺上手に中二階のある下座敷の道具爰に以前の梅山宮路の兩人酒に醉ふて寐て居る枕元に新五郎新六留場の龍太住居時の鐘よて道具留る

(新六)やう〳〵の事で寐て仕舞ッたが人間ッ三分で化物七分外道の面もよろしくと云お俺未な顔色をして役者狂ひもない物だ(龍)併シかうして寐て仕舞へば此間に早くドロムのだがお藏を建ぬ其内ハめつたにハ歸られぬ(新)ろんな卑しい事を言ハぢと早く歸る支度をしろ(新六)せめて二階の御馳走でも詰込でから歸りたい(新)エヽ下素張ッた事を云なといふに(龍)それでハ歸る支度に致しまそ(新六)今直キにお知らせ申升ト兩人奥へは入る跡跳への唄に成り新五郎庭下駄を履き平舞臺へ下りて供の來るのを待ッてなしにて聞ば是なる女中衆ハ鎌倉御所にて御重役をお勤なさるお旗とやら夫がかうして遊所場の茶屋の座敷へ醉倒れ前後も知らぬ樣子でハもしや後日に御身分にかゝハる事でもありハせぬか案事られる事じやなァト又唄に成り上手の中二階の障子を明け以前の江嶋出て新五郎へとなしあつて態と平打のかんざしを抜取り二階より落と新五郎此音に恟りして二階を見て(新)江嶋樣にハいつの間にかそれへお出なされましたか(江)呑ぬ御酒を過しまして頭痛が致してならぬ故風に吹れて居た所ッィ龜相にて二階から管を落しました(新)只今それへ持參致しまそから暫くお待下さりませ(江)ィェこちらから參りますから拾ふて貰て下さりませ(新)慥爰らへ落た樣子だト唄に成り新五郎中二階の下へ行キ管を拾ひ居る爰へ江嶋二階を下りて下座敷へ來り邊りを見て(江)こりやまァ宮路殿も梅山殿もよい心持に高いびき(新)下寐なつてお出ゆゑ只今お暇致そ所(江)さうして今の管ハそこらにござりましたかひなァ(新)慥にお渡し申まそるト件の管を出そ江嶋其手をじつと取る新五郎ハぞつとせしてなしよろしく江嶋管を取ながら(江)此管の平ラ打にいふもどうやら表ぶせ(新)何事成り共私ハあなたの仰せハ背きませぬ(江)そんなら聞て下さるか(新)聞いでなんと致しませう(江)テモまァ嬉しいト傍へ寄らふとそる此時宮路梅山寐返りをそるゆゑ兩人恟りして飛び退キ江嶋有合ふ行燈の明りを吹消そを木の頭下座の唄の上ゲにて兩人傍へ寄り添ふ宮路梅山ハ顔をあげ袖にて口を押へながら江嶋新五郎の樣子を伺ふ此摸樣風の音にて　ひやうし幕

大詰

観音前蕎麥の場

一　和作屋藤兵衛　　一　獅子舞　十六
一　鼻　鯖右衛門　　一　同　紋次
一　淀屋　初五郎　　一　囃子方　笛七
一　番頭　虎　六　　一　同　鉦八
一　菜畑峪右衛門
一　太神樂　丸市　　一　藤兵衛女房おむつ
一　荷かつぎ鈍八　　一　蕎麥屋の下女おつゆ

本舞臺上の方蕎麥屋の庭口左右板塀此前に笹を建たる松飾り手打蕎麥と記せし掛行燈下手向ふ河岸の町家を見たる灯入の遠見ずつと下の方町家の張物にて見切り都て江州石山觀音前川端の体爰に太神樂の親方一万度を持荷かつぎの男狹箱をおろし此上へ太鼓を置て叩イて居る獅子舞二人獅子を舞ッて居る其外笛吹摺鉦の囃子方立懸り幕明く

ト上手の入口よそばやの下女一人出て來り(女)モシ太神樂さん御苦勞でござんした例年の延喜だから親方が皆さんに一杯上度と言ひ升から奥へ通って下さんせ(○)夫い有難ふござり升實い夫を樂しみにてちらのお店へ來ましたのだ(△)直にあしたい元日丈婦ェさんの嶋田がよく出來た(口)悪ド拂ひに其天窓を獅子が喰付てあげ升う(女)イエ〳〵夫にい及ばぬわいなァ(○)何にしろ狹箱と一万度い爰へ置てみんなも御馳走に成るがいゝ(五人)イヤ有難ひ〳〵ト皆々庭口へ這入る跡ばた〳〵に成り向ふ和作屋藤兵衛着流し一本差にて走り出て來り(藤)若旦那が虎六めを逃さぬ樣に蕎麥屋へ這入り附て居とい言う物の一筋繩で行ぬ奴ドレ踏込で引捕へト庭口へ這入らうとする此時人音する故藤兵衛下手の町家の影へ隱れる庭口より虎六着流し草履にて出て來り邊りを見廻し(虎)イヤけんのんな事もある物だ和藤の女房のおむつめが亭主に捨られて爰へ來て下女同樣に働いて蕎麥屋の手傳ひをして居ると聞咄しが附くなら已が引取り年增盛りのあのおむつを女房に持て遣らうと思ひ酒の相手をさせながら當ッて見る内居なくなり爰の下女に樣子を聞ば別た處か藤兵衛めといま

だに夫婦で此近所へ世帶を持て居るとの事品に寄つたら菜畑さんと醉た紛れに口が辷り茶入の話しを仕たのを聞込み亭主の所へ駈附て告口をする氣かも知れねへ何にしろ此茶入を持て居るのハあぶない物古いやつだが少しの内どこぞへ一寸忍バせる隱し所ハあるめへかト思入有てサットある〳〵太神樂めが建かけて往ッた一万度あいつの中へさうだ〳〵ト懷ろより茶入を出して一万度の中へ隱して居る此時門の内にて峪右衛門虎六ハどうした虎六〳〵ト呼ぶ是にて虎六一万度を元の通り建かけて居る庭口ゟ菜畑峪右衛門羽織着流し大小にて出て來り(峪)虎六何で身共一人置去りにして逃るのだ(虎)ィエ〳〵逃ハ仕ませんが後難を除る爲に一寸呪ひを仕ましたのだ(峪)何呪ひとハ(虎)ハテ大晦日の晩なぞハ鬼がきよろ〳〵あるきますから其惡ゞめを拂ふ爲に太神樂の一万度へ彼の一品を忍ばせて後難を除ケますのだ(峪)ィヤ何もそんなに狼狽て騷がゞ共の事でハないか(虎)ィヤあなたハお氣が附れまいが和藤の女房がいつの間にか居なくなつたハ藤兵衛めに知らせに往ッたに違ひない(峪)其藤兵衛に捨られてやもめで居ると言ッたでないか(虎)所が大キな買冠りで下女に内々聞て見れば別れた處か藤兵衛めと中よく暮して居るとの事(峪)さう言ふ事を知つたらば祝義をやらぞに置ふ物なんぼ此家が藪醫麥でも藪酒手とハむだな譯だ(虎)ろことでこつちが裏をかき態と一杯喰た積りで藤兵衛めをいがませる工風を仕たのでござりまそ(峪)何樣夫で一品をト思入有て(峪)流石ハ虎六ゟ早い〳〵ト爰へ門の内ゟ淀屋初五郎着流しにて出て(初)峪右衛門殿歸られるなら一寸待て貰ひたいト前へ出る(峪)誰れかと思へばお手前ハ勘當中の宿なし息子初五郎殿でムつたか(初)虎六そちもとこにおるか久々ゟて逢つたナア(虎)ィヤさう虎遣ひをあらくして呼捨にして貰ひまそまひ是でも今でハ一本立千里を走る早足も堂嶋へ行き米相場の中買仲間で顔を賣る金箔附きの旦那樣だ(初)暇を出す折何方へ奉公住を仕樣共差攘ひなき一札を渡してあれば筑ゞ家より借出す金を諸拂ひに渡した積りで是におる峪右衛門殿と二人りして遣つた事も知れて居れと夫ハ今更言出しても十日の菊の手おくれにむだと思つて言ひハせぬが今方聞た茶入の話しあの節貴樣が誤ッて微塵に碎ィた其茶入がどうしてそつちの手にあるか夫が聞せて貰ひたい(峪)コレ初五郎何を申のだ言ハせておけばよいかと思ひ身共が是なる虎六と申合せて量鋪から借出ゟ金を横取なし遣ひし抔とハ何を證據に聞捨ならぬと申とこじやが今更言ッてもむだだとあれバ夫ハ夫ゟもして置ふが碎ィた茶入を虎六が持て居るとハ何のたハ言コレ〳〵虎六初五郎ハ血迷つてゝも居る樣子よく言聞せてやるがよい(虎)扨宿なしの若旦那なんぼ黄金の鷄と言ふ名前の附た茶入でも手品の種じやァあるめへし微塵に碎けたあの品が何でこつちにある物かそりやァそつちの聞違ひ疑ハしくば懷ろから足の爪先キてつぺん迄よく改めて見るがいゝあればこつちが閉口だがなければそつちの言懸り只置かねへからさう思へ(初)ヲヽ改めてない時ハそつちの自由になる替り二人りの懷中改めてあれバこつちが存分に言ハねばならぬ事が

ある(峪)コリヤ面白い其義なら座敷へ往ッて二人り共裸に成て見せてやらう(虎)此寒いのに門端で裸にもなられぬから夫じやァ座敷へ一所に行ふト此時下手の張物の影よりいぜんの藤兵衛出て(藤)イヤ其詮議にハ及び升まい(初)そちハ藤兵衛よく來てくれた(峪)シテ詮議にハ及ばぬとハ(虎)所詮むだだと締めたか(藤)夫ハ言ハずと知れた事盗を仕様と言ふ奴が改メろと言ふ懐ろにあつた例しのなひのを知り初五郎様を留に出た(初)コレ〳〵藤兵衛おむつ殿から知らせをばそなたハ聞ぬか知らね共正しく茶入を此二人りが(藤)ハテ裸にして改めたと此日本ハ神國故神を祈ッて正直の頭べに頂く一万度を取に懸る故恂りして(虎)アヽこれ〳〵藤兵衛夫ハよせ今爰に居た太神樂が預けて往ッた一万度指でも附ケてハおれが濟ねへ(藤)假令預けて行ふ共祈禱をするのに子細ハなひ(虎)イヤ其子細ハづんとある大晦日に人の袂ひへ手を附ケてハ濟ぬ譯だ(藤)何と馬鹿なト留る虎六を突退ケ一万度を取に懸る峪右衛門南無三と言ふ思入にて一万度を持て逃様とする藤兵衛是を引戻し立廻り兩人を投退け一万度を取て初五郎へ出シ(藤)茶入ハ此中に入りまするト初五郎一万度の中より茶入を出し改めて(初)ヲヽ紛ふ方なき實の茶入(峪虎)夫をこつちへト懸るを藤兵衛一万度の樽にてさん〳〵に打ちへる此時ばた〳〵に成り向ふより鼻鯖右衛門嫁おむつ藪蓄麥の提灯を持連立て出て來り此体を見て(鯖)悴茶入ハ手に入ッたか(初)今手に入ッて此通りト見せる(むつ)夫でハお早く鳳木様のお屋敷へお出下さりませ(初)シテ〳〵吾妻の安否ハどうじや(藤)あなたの勘當ゆりる爲自害をして死ました(初)何自害をして死だとな(鯖)今端の際の遺言にお姫様と御縁組をなさる様にとくれ〳〵お頼み(むつ)さう成る時にハ御勘當も忽ゆりて元の御身分(藤)こりや御改心なされませば迷ひの惡广ハ拂へませぬ(初)今ぞ迷ひの念も晴れ明れば初旭の黄金のにハとりト爰へ峪右衛門虎六起上り(峪虎)是が晦日の厄落しかト逃ふ懸る此時門の内より以前の大神樂大勢出て來り〇ろれ惡广を追ッ拂へ(皆々)合点だト獅子の鳴物に成り獅子舞ひ二人獅子を冠り峪右衛門と虎六を追ひ廻そトヽ藤兵衛一万度と持て虎六を踏へる初五郎ハ茶入を持て峪右衛門を引付る跡皆々引張りよろしく右の鳴物にて

幕

序幕　北野大茶湯の場

一　利休宗易
一　殿下秀吉
一　曾呂利新左衛門
一　片桐市の正
一　福嶋左衛門
一　利休の悴　少庵
一　宮嶋辨三
一　利休の娘　お三
一　百性　臼右衛門
一　町人　六兵衛
一　其外拜見人　惣出
一　數寄者の大名四人

本舞臺上の方貳間の柵門下の方へ續いて柵矢來能所へ大茶の湯觸書の張出しあり爰に百性町人大勢茶の湯拜見の仕出しにて立懸り宮神樂にて幕明く

(百性)何と皆の衆あれへ張出してある今度のお觸書を御覽じたか上ェ樣のお手づからお茶を立て下民の者に頂かせて下さるとゝ此世開けて例しのない有難ひ事でゝないか(町人)聖德太子と言ふお方が憲法とやらをお免しなされて下万民を悦ばせたと言へど夫ゝ見ぬ世の昔語り此有難ひ時節に逢ふのゝ實に千載一遇とやらで御同然ゑ幸福あることだト皆〳〵わや〳〵言ひながら門の内へ這入る右嗚物にて向より福嶋左衛門好みの鳶上下形りにて近臣宮嶋辨三附隨ひ出て來り花道にて(福嶋)六十余州を手の内に握り給ふ我君のお物好とゝ言ひながらあの松原へ圍ひを補理ひ貴賤上下の差別なくあぶくの稽古の大茶の湯ハテ苦々しい事でゝある(辨三)月頭にて天神の神樂殿でゝ湯花の神事(福)こりや菅公迄茶の湯仲間へ引入れられしと相見ゆるト舞臺へ來り福嶋觸書の張出しを見て(福)ィヤ去りとてゝたわけた催し片桐が來ておらば内談仕度き事あつて福嶋是に控へ居ると汝參つて知らせてよからう(辨)ハット上手へ行懸る爰へ門の内より片桐市の正同じく上下形りにて出て(片)福嶋殿ゑゝ御不快にて御不參なるかと思ひしに能ぞ集合召れしゑ(福)内談あつてそこ元に逢ひ度く思ひ〻折柄に能ぞ是へ參られた(片)シテ御内談とゝト福嶋家來を見やり(福)其方ゝ門内へ參り着到屆けと至してよからう(辨)ハット門内へ這入る跡に兩人床几へ腰を掛(福)扨片桐

殿御邊も拙者も戰場にて一命輕んじ君に仕へ鎗先を以て斯迄に登庸致した身分にて申さば戰場活殘り治國にわつてゝむだ人ながら今豐臣の威風に靡き四海ゝ大半穩かなれど關東の北條抔ゝ專ら野心の兆ありと世の風俗も耳に入る然るに殿下御油斷にて最早四海ゝ手の內に握りし成りと驕奢に募られ茶坊主上りの利休如きが鑑定せし迚埒もなきヤレ天目の茶拶のと武道を磨く眼で見てゝ何の役にも立ざる物を高金を以てお買上ゲに成り千金を費し給ふゝ義政よりして足利の天下滅そる兆を生ぜし不吉を招くの御振舞夫に烈なる御連枝迄皆茶を好んでござるからゝ定めて御邊も後難の患ひを思ゝも茶人となり利休を信じて居らるゝならんと此福嶋ゝ推察致すト是にて片桐笑みを含み(片)日頃の剛氣に福嶋にゝ茶事の費を思ゝれて其心痛ゝ尤至極吾も最初茶の湯抔ゝ武門の家に無用な物とにがゝしく思ひおつたが昨年の多雪の夜に上ニ樣不意の思し立にて利休の家へ成らせられしに差支へなく多人數の供奉の者へも厚き饗應是ぞ悟道の心得にて茶事を好めば禪學の法に適ひて勇士の身にてゝ茶に事寄せて機密を語らひ不意の夜討に動ぜざる覺期の助けに成らんかと數寄者仲間へ道入りしが斯く千金の費を厭ゝも茶器を集めて弄ぶゝ驕奢よ更り足利の天下傾く例しあればよしなき事と思ひおる(福)イヤ善學か惡學か夫等の邊ゝ辨へぬが軍學兵書に心を委ね武術を磨く勇士の身で茶の湯抔と習ひし迚何の助けと相成べき此福嶋ゝ片腹痛し(片)イヤ夫故に御身の事を横紙破りと申のじや何ゝ然れ此度の仰せ出されゝ最珍らし茶席へ出られて迷惑でも殿下のお手前拜見お仕やれ(福)イヤ目まだるい茶の湯抔を見るのも抱腹笑止なるが集合致した上からゝ殿下のお前へ出ぞば成るまい(片)然らば福嶋同道致さう(福)イザ案內を頼み申ト立上る神樂にて道具廻る

本舞臺一面芝原の貳重後ろ奧深に北野松原の遠見所々に振能ヤ松の立木具中へ本疊を四疊數ヤ後ろの一疊の前へ穗附キの伊豫簀を卸しあり上手の疊の隅へ穴を堀し爐此上の松ヶ枝より鎖りにて釜を釣り此脇へ柴を置キ其外小手桶茶棚抔並べ野外の茶の飾り附よろしく下手客座の疊に殿下秀吉烏帽子差扳胞衣の拵へよて住居前に菓子を入れし折敷あり好の茶碗にて茶を呑居る眞中の疊に曾呂利新左衛門好の鬢上下形りにて住居上手の炉の前に千の利休更たる坊主鬢にて法衣を着て住居此見得合方にて道具留る

ト秀吉茶を喫して新左衛門是を扱ひよろしく納り(秀吉)朱文公が武夷の山水張厚子が野亭の酒何れも閑雅を樂みし古キ例しも今目前利休が工風の野外の茶適れ策前感じ入しぞ(利休)如何と存せし不手前も御意に叶ひて何程か有難く存じ奉まそる(新左)扨利休居士へ伺ひまそるが野外のお茶と申のいかなる故事のある事か心得の爲新左衛門御傳授に預りたい(利)左れば野外の茶と申ゝ往古の風を思ひ出に只形のみを御覽に入しが曾呂利にも御承知の如く聰じて茶の湯ゝ禪學より出心を世外の閑境に遊ばしむる悟道に等しく候へば維摩が方丈の室に准へ四疊半の圍ひを用ひ佗を數寄者の賞翫となせば柴火のお茶の故事に依殿

下へ點せし野外の茶御傳授迚ハ外になし(秀)柴火の茶とハ面白し吾も羽柴の性なりしが今豊臣と性を更め佗を好ひも陣中にて勇氣に充る者共に膳を練らせん茶の學び野立の法を覺へしハ秀吉一ッの德を得たり(新)御道具拜見致せし處高麗茶碗塗天目竹の蓋置釣釜迄何れも銘器古物なるが取分感に絶ましたハめんつう形の水瓢しィヤ面白ひ事に厶りまそる(利)野外の義故軸を掛御覽に備へる床もなく花入等も整ひませぬハ偏に御用捨願ひまそる(秀)イヤ其花ハ美しきト後ろの伊豫簾の内へ思入あつて美麗な花であつたわへト宏つとこなし新左衛門是を見て取り(新)アィヤ利休居士御勝手に居らるゝハ御令孃でござりまそか(利)お尋ねに預り恐入れど先妻の娘にて不束者にでござりまする(新)よき折柄故お目見得の義をお上みへ願つて進ぜませう(利)夫でハ恐入まそる(秀)イヤ苦しふない是へ〳〵(新)コレ〳〵御息女是へ出られよト呼ぶ是よて伊豫簾の影より娘お三人拵能キ拵へにて恐る〳〵下手へ出て平伏そる秀吉是を見て(秀)利休にハ少庵のみにて女子ハないと思ひおりしがよき娘を持しよな(利)先年故郷堺なる門弟方代屋宗庵方へ縁付ましてハでざりまそれど不幸にして夫を先立て宿へ歸ッておりまそる(秀)シテろちが名ハ何と申ぞ(利)ソレお答へを申上よ(お三)さんと申を不束者お見知り置れ下さりませ(秀)勝手に居ッて今日の手傳ひ滿足に思ふぞよ(三)冥加に余るその仰せ恐入ましてでざりまするト上手より千の少庵坊主鑑十德形りにて出て來り(少)ハッ上ェ樣是へ成らせられ主を御存じなき故御一統樣お案事にでざりまそる(利)曾呂利一人お召連れよてお忍び故に各樣にハお跡をお尋ねと見へまする(秀)然らば新左園ひへ參らう(新)イザ成らせられませうト唄に成り立上るお三疊の前へ草履を直と秀吉是を履キ新左衛門少庵附ィて上手へ這入る(利)過ギし頃よりお茶の湯の數寄者と成らせ給へ共佗の本意を失ひ給へば斯く閑雅なる野外の茶を君へ御覽に備へしに殊の外御意に叶ふた(三)是と申も御意に入の曾呂利殿がお傍にて御機嫌取々お扱ひが宜しき故でござりまそるト爰へ下手の松影より以前の片桐福嶋出て(片)利休殿にハ今日ハ異る茶席を催されしぞ(利)ゑなた樣かと存ぜし所片桐侯に福嶋侯お席へお着キ下さりませ(福)茶の所望よりお手前に所望の仕度キ物あつて兩人是へ推參致した(利)シテお望とハ(片)其望ハ外ならぬ只今殿下のお目に止りし是なる息女を我々が横合より申受たい(福)野外の茶の湯の挿花も殿下のお手折なき内に片桐殿か福嶋が曲ゲて所望を致したい(利)當時天下の英勇と御名譽なる御両侯が利休の娘を御所望とハ是にハ何か子細あらんが彼れハ殿下が御所望でも他へ遣ハされぬ末亡人(片)然らば殿下が御懇望にてお傍へ召そと仰せられても(福)お受ハせぬと言ハるゝか(利)御念の入りし其お詞娘を賣て榮利を計る淋しき心ハ毛頭なし(片)其心底を承り我々両人案堵致した(福)今の過言ハ免し召れひト両人上手へ這入る(三)御酒機嫌共見へませぬが只今のお二人樣ハなめげなお方よでざり升る(利)忠臣無二の片桐福嶋そちを所望と申せしハ利休の心を引見ん爲じや(三)ろハ何故でござりまそる(利)是へ上樣お

成を願ひそちをお目見得致させしい深き心の在ての義と速くも見止め両人が妨げに出し物であらう(三)夫なればお手傳ひに參らにや宜しふムり升た(利)よしや殿下のお目に止りそちを所望遊ばす共(三)お斷り下さりまそるか(利)何でお受けを致そべきぞトにつこり笑ふ

此摸樣合方風の音にて道具廻る

本舞臺上手三間常足の貳重下手貳間跡へ下ゲて同じく貳重軒先へ伊豫簾を卸し此後ろ出這入りあり上手の家臺に秀吉臺子へ向ひ茶を立て居る下手に上下形りの數寄者四人住居茶を呑み居る都而仮建テの囲ひの摸樣宜しく靜なる合方にて道具留る

ト皆々茶を呑み(皆々)一統有難く存じ奉升るト禮を頂る秀吉茶碗を納め(秀)チト密々に新左衛門へ申付る一義あれば少庵と同道にて是へ出る樣申てくりやれ(皆々)委細畏り奉るト皆〻下手へ這入る引違へて下手より以前の新左衛門少庵連立出て來り(新)ハッお召にムり升るか(秀)少庵ハ父の利休に罷出る樣迎ふて參れ(少)ハット下手へ這入る(秀)扨新左衛門今日の野外の茶ハ面白い事であつた(新)御意にムり升る殊に美事なる花抔を勝手へ貯へ置升るハよい嗜みにムり升る(秀)何樣美事な花でありしが彼れハ何才にあるであらうぞ(新)利休ハ最早七十歳彼れが娘にムり升れば三十路に近いかとも存じられ升るが何に致せ三十二相整ひおるとも申度キよい器量にムり升れば年よりハ五ッ位ハ若く見ゆるでムり升せう(秀)然らば廿六七なるかよも三十路にハ成まいが夫トを先立ッ未亡人とハ不便なやつも

ある者じや(新)御意の通りあの樣な美婦に一生後家と立させ後の夫を持せ升せぬハ世に言ふ實の持腐れ不便な者にムり升る(秀)夫故利休に申附け聚樂へ召出そ心得じやが老人めが否みハせまいか(新)是ハ又いのな事一天下を知ろし召るゝ君の御所望何故に利休が否を申升せうや(秀)イヤ〳〵彼れハ何となく見識のある親仁あれば吾も如何と案じられる(新)左樣お案事遊ばそなら新左衛門めが御内意を申聞るでムり升せう(秀)然らば是へ招ずとそちに内意を申せばよかつたト爰へ下手より以前の少庵先キに利休出て來り下手の家臺より上り少庵前へ出て(少)ハッ召連れ升てムり升る(秀)ヲヽ待兼しぞ老人近ふ(利)然らば御免下さり升せうト前へ進み平伏そる(新)アイヤ利休居士今日の野外のお茶が殊おふ御意に適ハせられ上樣にハそこ元へ御内命がある由ゑて是へお召に相成升た(利)余り佗たる茶の湯故ふた今日用ひし釣釜ハ古物の樣に見受しが芦屋釜でハなかりしか(利)御鑑定の如く古法眼の圖を取升た芦屋にムり升れど蔓の工風を仕り釣り用ひ升てムり升る(秀)理りなるか湯の熱能く又格別の服加減であつた(新)芦屋釜より芦の穂の伊豫簾の影に見受升た花ハ美事でムり升た(利)何花が美事と云ハるゝハト合點の行ぬ思入(秀)ヲヽあの花ハ只今でハ主なき花と聞し故聚樂へ所望致したいト是にて利休扨ハと心付く此時上手の家臺の影より片桐福嶋出懸ゝ樣子を伺ふ少庵見て(少)誰れやらあれにト是にて両人隠れる新左衛門是に携ハる

今ぞ小春の麗かに再び花咲く歸り花(秀)我詠めに致す間早く聚樂へ差出し呉りやれ(利)何れお答へ申上升るト當惑のこなし笙の入り去合方にて

幕

二十二

明治廿二年七月廿二日印刷
同　七月廿五日出版
版權興行權所有

著作者兼發行者　竹柴金作　浅草區馬道町二丁目十二番地

印刷者　木村隆次郎　京橋區加賀町十三番地由己社内

賣捌所　歌舞伎新報社　同銀座四丁目十六番地

定價八錢